

### 3 節 宗教の起源

#### 1 宗教のおこりについて

宗教がいつどこで、どのようにして起こったかという問題は、大きく分けて歴史的側面と心理的側面の二つの側面から考えることができます。

まずは、考古学や人類学などの研究成果をもとに、宗教史をひもといいてそのおこりを考える方法です。そもそも歴史の跡をたどって宗教のおこりをたずねることには多くの困難があります。なぜなら、650万年以上にわたる人の歴史のうえで、その文化や生活の状況がほぼ明らかになっているのは、おおよそ5000年から7000年ぐらいの間にことに過ぎないからです。しかし、たゆみない研究の成果によって、人びとの生活や文化の様子が明らかになった時代には、どこでも宗教がその中心に大きな位置を占めていることが確認されています。数千年にわたってそれぞれの時代に生まれ死んでいった無数の人びとが、宗教をよりどころにし、それを大切に伝えあるいは受け継いできたという事実は、宗教が人間にとていかにかけがえのないものであるかを物語っています。

次に宗教のおこりをたずねる上でもう一つ考えておかなければならないことは、人間の歴史というものは、いのちを生きた個々の人間の歴史の、無数の連続と累積によって成り立っているということです。つまり、受け継がれた宗教はその限りにおいては常に古いものであるとしても、それを受け継ぐ個々の人間にとっては常に新しいものなのです。一人の人間が宗教を信じるということは、その人にとってはこの世に生を受けて初めての新しい経験なのです。だから宗教のおこりは、なぜ一人の人間が宗教を信じるようになったのか、なぜ信じなければならなかったのか、言葉をかえて言えば、「なぜ人間は宗教を必要とするのか」を聞くことであると言えるでしょう。このような視点から宗教のおこりを考える方法は、人間のどのような状況、特にどのような心理的、精神的状況において宗教が発生したかということをたずね

るもので、宗教についての心理的研究と言えましょう。

歴史的研究と心理的研究では、その研究対象や方法は全く別個のものと言えますが、宗教のおこりという問題を考えることについては、先に述べたように、決して無関係なものではなく、お互いに補いあう関係にあると言えます。

#### 2 世界の宗教とその分類

人類の歴史を振り返ってみると、いかなる民族も宗教を持たない民族はなく、またその宗教の種類も実にさまざまであることがわかります。

こうした世界のさまざまな宗教について理解を深めるには、数多い世界の宗教の全体を眺め、それらを何らかの特徴にもとづいて分類したり、個々の宗教についての知識を整理してみることが必要です。しかし、一口に宗教の分類といっても、そこにはさまざまな視点があります。例えば、宗教的对象の数や性格によって、多神教、一神教、汎神教<sup>はんしんきょう</sup>というように分類したり、また、宗教の地理的分布に注目して、アメリカの宗教、中国の宗教、日本の宗教、インドの宗教……といったように分類することもできます。宗教の性格に重点をおいて、啓示的宗教と非啓示的宗教、あるいは戒律的宗教と非戒律的宗教と分類することもできるのです。

こうしたさまざまな宗教の分類は、それぞれの目的や立場からは、どれもそれなりの意味があると言えますが、それだけにかえって、宗教のある一面だけを強調したり、他の側面を無視してしまう危険性をともなっています。

そこで、現在もっとも広く用いられているのは、原始宗教、民族宗教、世界宗教の三つに分類して考える立場です。もちろん、この分類も完全なものではありませんが、宗教の広がりとともに、宗教の性格や発展段階なども含めて考えることができるので、世界の宗教を概観するには適切な分類と言えましょう。

### 3 原始宗教

原始宗教という場合、原始という言葉には二つの意味が含まれています。一つは、太古、すなわち時間的にいって大変古い時代という意味です。もう一つは文化が比較的単純で、原初的形態を持つという意味です。ただ、太古の宗教の研究は、古い時代の遺跡や遺物からその概要をうかがうことしかできないため、全体を知ることが難しいという制約があるのに対して、未開文化社会の宗教の場合は、比較的研究しやすいのです。そのことから一般には、原始宗教というと未開文化社会の宗教を指している場合が多いことに留意する必要があります。

原始宗教の一般的な特徴は単純な文化しか持たず、ごく原始的な農耕や狩猟、採集の生活を営んでいる部族単位の社会に多く見られ、開祖も経典もまとまった教義もなく、またその教えを他の部族に伝えるといった伝道も見られないということなどがあげられます。しかし、原始宗教は、人びとの生活の全領域に深くかかわっており、政治や経済や社会制度と区別することが困難など日常生活に密着しています。原始宗教といっても、その内容や形態はきわめて複雑多様です。代表的なものとしては、アニミズムやマナ、シャーマニズムなどをあげることができます。

アニミズムというのは、すべてのものには靈魂が宿っているとする「靈的存在への信仰」であり、日常生活のさまざまなできごとを、そのような靈的存在との関係でとらえようとする形態の宗教です。

マナというのは、事物や現象に宿るとされる超自然的で神秘的な力を信じる形態の宗教です。シャーマニズムは、シャーマンと呼ばれる神がかりによって靈的存在と直接交流する能力を持った人物を中心とする原始宗教です。

なお、原始宗教というと、現代の私たちには無関係なものと思われがちですが、人間の非常に素朴な宗教的心情の現れですから、現代社会においても広く見られることに注意しておく必要があります。

### 4 民族宗教

民族宗教というのは、国民的宗教と呼ばれることもあるように、歴史的に見れば民族の統一などによる国家の成立とともに、その国の国民多数によって営まれる宗教です。

民族宗教には、大別して二種類の形態があります。一つは、原始宗教が国家の成立とともに組織化されたもので、例えば、古代エジプトやバビロニアの宗教、あるいは、マヤ帝国やインカ帝国、アステカ帝国の宗教など、古代国家の宗教がこれに類します。これらの宗教はその基盤である古代国家の滅亡とともに地上から姿を消し、すでに過去の宗教となっています。

民族宗教のもう一つの形態は、特定の国に特定の教祖が現れて、独自の宗教が組織化されたものです。

この宗教は部族中心の原始宗教よりはるかに広く、民族や国民を単位として広まっています。しかし、その成立の歴史的背景や教義の性格などから、他の国民や民族にまで広く受け入れられることが困難であるという点で、世界宗教とは異なる一つの特徴があると言えましょう。

例えば、古代イランに起こったゾロアスター教<sup>①</sup>や、インドでマハーヴィラによって始められたジャイナ教<sup>②</sup>、孔子<sup>③</sup>を開祖とする中国の儒教などがあります。また、教祖といわれる人はなくても、優れた組織者が出て、国民の多数が信じる宗教となったユダヤ教や、インドのヒンズー教、中国の道教なども、この後者の形態に分類される民族宗教です。

①ゾロアスター教 紀元前7世紀ころ、ゾロアスターが自然信仰を体系化することによって生まれた。人間の幸福は光明神の恵みによって、最終的に楽園に行くことにあると説く。

②ジャイナ教 徹底した苦行と不殺生によって業を払い落とし、魂を浄化することで、輪廻を絶つことができるとして、厳しい戒律の実践を説いた。

③孔子 (B.C.551~552~B.C.479) 春秋時代の後期に、周の封建秩序である「礼」を理想化して説いた。この思想を受け継ぐ人々を儒家と呼ぶ。

## 5 世界宗教

世界宗教というのは、国家、民族、人種はもとより、地域や文化や政治などのあらゆる壁をこえて、広くすべての人間に受け入れられる内容を持った宗教です。現在、世界宗教としては仏教、キリスト教、イスラム教（イスラーム）の三大宗教があり、いずれも人種や国境、性別、階級をこえて世界の多くの人びとから信仰されています。

世界宗教の特徴としては、人類すべてにおよぶ普遍性があること、いずれも教祖を有する宗教であること、個々の人間の精神的救済を重視し、深い自己内省と宗教の人間愛にもとづく熱心な伝道を行うこと、教義や儀礼、教団などの組織も整っていることなどがあげられます。

**仏教** 仏教は、紀元前5世紀ごろに、北インドのシャカ族（釈迦族）の王子として生まれたゴータマ・シッダッタ<sup>④</sup>（Gotama Siddhattha・釈尊）によって開かれた宗教です。

ゴータマは人もうらやむ幸せな生活を送っていましたが、生・老・病・死に代表される人間苦の解決を目指して29歳で出家しました。6年間の修行を経て、ついに人生の根本問題の解決を得て、ブッダ（Buddha・仏陀）となりました。

ブッダとは、真実を悟った者、覺者を意味する尊称ですが、わが国ではシャカ族出身の聖者という意味で、釈尊と呼ばれることが多いようです。

釈尊の悟られた真理は、「縁起の法」といわれ、具体的には「四諦説法」に明らかなように、人生苦の直視と苦の原因の正しい認識、そして苦を克服する正しい実践として説かれています。

釈尊は80歳で涅槃に入られるまで、45年間にわたって中印度を中心に旅

④ゴータマ・シッダッタ（B.C.463～B.C.383?）

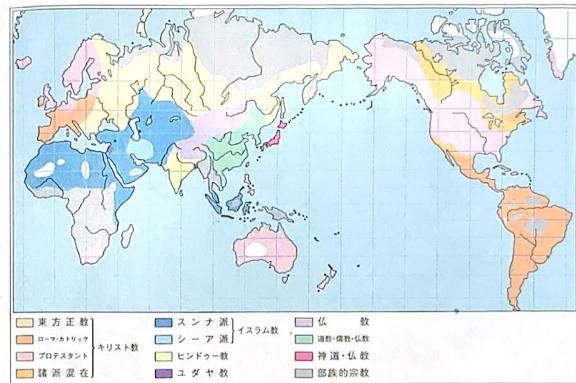


図3-1 世界宗教分布（仏教文化事典より）

を続けて教えを説き、自ら悟った真理を人びとに伝えられました。その生涯が示すように、仏教の特色を言えば、真実の「智慧と慈悲」の教えであると言えましょう。

仏教はその後、多面的な発展をとげ、アジアを中心に広く世界各国に伝えられています。

### キリスト教

キリスト教は、紀元1世紀の初めに、ローマの支配下にあったユダヤで、イエス・キリスト<sup>⑤</sup>（Jesus Christ）によって開かれました。

イエスの生涯については資料に乏しく、さだかではありません。父はヨセフ、母はマリアといい、ガリラヤのナザレに生まれたと考えられています。30歳のころ、神の啓示を受けて伝道を始め、神の福音を伝えるとともに数々

⑤イエス・キリスト（B.C.4～A.D.30?）



図3-2 キリスト教礼拝堂

の奇跡を行って、しだいに人びとからキリスト（Christ・救世主）と仰がれるようになりました。

イエスは、当時のユダヤ教が神と人間との関係を厳しい律法と儀礼で規定しユダヤ人のみの救いを説いていたのに対し、神は悔い改めれば罪ある者をも救う愛の神であるとし、この神の愛への信仰と普遍的な人類愛を説きました。

その後イエスをキリストと信じるもののが増えるにつれて、ユダヤ教徒やローマ官憲の圧力が加わり、ついにユダヤ教への反逆者として十字架にかけられて処刑されました。しかし、イエスは処刑の3日後に復活したとされ、やはりイエスは救世主であり神の子であるという信仰を集めようになりました。

イエスの生涯やその教えは『新約聖書』におさめられ、全世界に十数億人といわれるキリスト教徒の心の支えとなっています。

### イスラム教（イスラーム）

イスラム教は、7世紀の初めに、ムハンマド<sup>⑥</sup>（Muhammad）によって開かれました。

開祖ムハンマドは、アラビアのメッカに生まれ、幼いときに両親と死別しましたが、のちに商家へ入って幸福な生活を送りました。やがてムハンマドは、メッカ郊外のヒラー山の洞窟に籠もって瞑想にふけるようになり、40歳

⑥ムハンマド (570?~632)

のころ、アッラー（Allah）の神の啓示を受け、自分が神の使徒であること自覚し伝道生活に入りました。

当時のアラビアは、各部族の奉じる多神教の社会であり、唯一絶対の神アッラーへの帰依を説くムハンマドは、激しい迫害を受け、メッカを追われました。しかし、支持者の結束をかため、勢力を拡大したムハンマドは、メッカに対して聖戦を挑み、いくたびかの戦いの後、ついにメッカを制圧してイスラム教をアラビアの宗教として確立させました。

イスラム教の教えは、経典『コーラン（クルアーン）』に示されている唯一絶対の神アッラーへの絶対帰依を根本とし、信仰告白、1日5回の礼拝、ラマダン月の断食、メッカへの巡礼などが信者の義務とされています。



図3-3 イスラム教礼拝風景